

パネルディスカッション

高校・大学は入試と教育にどう向き合うか

- パネリスト▶ 澤井 洋一（京都府立城南菱創高等学校主幹教諭）
 田中 昌一（大阪府教育センター附属高等学校首席）
 池田 径（大阪府教育センター附属高等学校指導教諭）
 野村 純（千葉大学教育学部副学部長(研究推進、国際交流)・教授）
 コーディネーター▶ 細尾 萌子（大学コンソーシアム京都高大連携推進室コーディネーター／立命館大学文学部准教授）

細尾：失礼いたします。細尾萌子と申します。私自身、フランスの論述中心の大学入試のバカロレア試験の研究をしております、それと引きつけつつ、非常に興味深く拝聴しました。まず、皆さまからたくさんのご質問をいただきまして、ありがとうございます。恐縮ながら、その全てを取り上げられなかったのですが、いくつか選ばせていただいたものをまずご紹介いたします。それらについて、3つの事例報告の報告者の方に、順番にお答えいただきます。その後、時間が余りましたら、それぞれの報告者同士で、お互いへの感想や質問を交流できたらと思います。



まず、事例報告①については、4つの質問を選ばせていただきました。1つ目が「教員の協働」に関する質問です。「こだわり学」とゼミは興味深い探究の授業ですが、それを直接担当

しているのが若い新任のお二人なのか。また二人に探究の理念をどのようにお伝えされたのか。各ゼミには教員が一人付いていると伺いましたが、他の先生方とこのお二人はどのように連携を取っているのか。

2つ目に、学校独自の科目のあり方についての質問がありました。このフォーラムで柱の一つに据えている「評価」に関わるものです。スカラーという学校設定科目があって、それを生徒が選択できることに興味を示された方が多かったのですが、これも単位として認定されるのか。スカラーの目標や年間計画、さらに評価の基準はどうなっているのか。

3つ目は「カリキュラム評価」の質問です。「いま、輝きの瞬間（とき）」をつくっていくためのさまざまな仕掛け、特に「こだわり学」やゼミ、生徒独自の時間割といった仕掛けの評価はいつ誰がどのように行っているのか。例えば、生徒や保護者が学校アンケートなどの形で関わることはできるのか。それとも学校の先生が自己評価の形でされているのか。

4つ目が、そのような魅力的な仕掛けにどうしてもかかってこない生徒や、仕掛けになかなか参加しない生徒をどのようにフォローしているのかという、生徒への「個別支援」の質問になります。

事例報告①への質問は他にもあるのですが、

いったんここで終わりました、事例報告②の質問へ移ります。

次は、大阪府教育センター附属高校です。学校全体として、パフォーマンス評価や探究ナビなど、本当にさまざまな取り組みをされていて、その研修を学校でされているお話は出ましたが、それ以外にも学校の教員が全体として同じ方向に向かっていくために何かされているのかという、これも「教員の協働」についての質問になります。

2つ目に、パフォーマンス課題という思考力・判断力・表現力を評価する課題をかなり前から取り入れ、しかもシラバスに計画的に位置付けてきたとのことですが、それでもなお自ら課題を見つかったり、計画的に取り組んだりする力が弱かったというのは、評価の方法に問題があったのか。パフォーマンス課題は、思考力などを評価するパフォーマンス評価の典型的方法の1つですが、その方向自体に問題があったのか。それとも、パフォーマンス課題だけでは不十分で、今、取り組まれているメタ認知の評価も加える必要があるのか。

3つ目に、探究活動に取り組むことでどうなっていくのかをイメージできない生徒、また、いくら働き掛けても後ろ向きになる生徒もいるかもしれませんが、そのような生徒にどのようにアプローチしていくのか。これも、先ほどの城南菱創高校と同様に「個別支援」の質問になります。事例報告②への質問は以上です。

次に、事例報告③の千葉大学への質問になります。千葉大学は国立大学ということもあり、高校生と大学生のどちらかという上層を接続してグローバルリーダーを育成することに取り組むの重点があるように見えますが、ボリュームゾーンの人たちにとっても高校から大学、仕事とキャリアを築いていく必要があります。ボリュームゾーンの生徒たちも含めて接続するための仕掛けがあるのか、1つ目の質問です。

2つ目の質問として、今日の前半の2つは高校の実践例だったわけですが、その2つを聞かれて、大学としてどのように受け止められたでしょうか。これは、私の司会としての質問ですが、加えさせていただきます。

では、事例報告①から、お答えをお願いいたします。

澤井：失礼いたします。ご質問、ありがとうございました。まず、教員の協働からお話をさせていただきますと「こだわり学」は2名が中心になって行っているのですが、この「こだわり学、ゼミ活動」というプログラムの流れは、専門学科の目玉として行っておりますプログラムです。その専門学科を回しますが、学科・企画推進部というところです。つまり、この専門学科の1年生、2年生のプログラムは分掌の担当の業務として回しております。そのため、2年生のゼミに関しましても、それを仕切る教員が1名おります。それも、学科・企画推進部の教員ですので、その中で当然ながら共有はできあがっております。また、各教科の先生が入っておられますので、各教科の先生に関しましては、まず年度当初に集まっていたいて、情報を共有して、目線を合わせます。その中に、当然ながら、1年生の「こだわり学」を行っていただくあの2名も入っております。このように、流れはできあがっているかと思えます。全教員に関しましても、全体の発表会等もございますので、学校全体でも、一応、目的意識等の共有はできていると考えております。これが1つ目です。

続きまして、スカラーです。時間がございましたので詳しい説明を省かせていただきましたが、実は、スカラーというのは単位制というシステムを最大限活用させていただきまして、その枠の中で設定したプログラムです。従いまして、これは科目ではございませんし、目標や年間計画も、当然、出てきませんし、評

価値もしませんし、単位認定もしないということです。そのため、スカラーを選択する生徒に関しては「これは、単位に入らないよ」ということは最初に言ってありまして、それを理解した上で、なおかつスカラーを取っていくという流れになるかと思っています。これが2つ目です。

3つ目の「輝きの瞬間（とき）」の仕掛けの評価です。これは、別に、仕掛けだけではなくて、どこの学校でもされていますと思いますが、われわれの教育活動は好き勝手に教員が行っているわけではございませんので、当然ながら大きな目標があって、その目標の下にわれわれが動いているということです。そのため、必ずそこには評価が生まれてくるというように私は思っております。その評価なのですが、教員レベルに落とし込みますと、教員に関しては、当然ながら、自分の授業に関する自己評価は挙がってまいります。また、われわれが次年度に仕掛けをつくっていくときに参考にさせていただきますのは、やはり生徒です。そして、保護者の方から上がってくるアンケートの結果です。そのアンケート結果を基にしながら「これは良かったな」「これは駄目だったな」というように反省をさせていただいて、次年度につなげていくことになるかと思っています。

最後に、個別支援の仕掛けにかかってこない生徒へのフォローです。これは、このようなどころでお話をさせていただきますと、絶対に良い話しかしませんので、そこで駄目だった話はなかなかしないのですが、仕掛けにかかってこないと言うと、釣りみたいで嫌ですが、当然ながら、そのような生徒はおります。しかし、これも私が発表の中で言わせていただきましたが、少人数の講座が非常に多くございまして、教員一人あたりの生徒数が非常に少ないですから、教員と生徒の関係性は、1対40に比べれば1対5や1対10のほうが密になってまいります。その講座が複数あるということは、1

つの仕掛けにかかってこなくても、別の仕掛けにはかかってくるかもしれないので、どこかの先生には相談に行ける可能性は、普通の学校よりあるかと私は思っております。

学校全体といたしまして、別に学校で推奨しているわけではないのですが、とにかく個別指導が徹底している丁寧な学校だと思っています。そのため、朝、昼、放課後には、先ほど、出ました渡り廊下等では教員と生徒がずっと話しています。質問したり、進路の相談に答えたりしています。そのような中で、個別の指導が徹底しておりますので、生徒側にしてみても、個別指導を利用していることになるかと思っています。全体の仕掛けにはかかってこないが「自分だけの仕掛けをつくってください」ということから、私も国語の教員ですが、その生徒用に2年間の学習プログラムを組み、私は「ルート」と呼んでおりますが、ルートを組んであげて、そのルートの進捗状況をチェックしてあげるということも、本校の単位制の形ではできると思っております。



細尾： ありがとうございます。では、次に事例報告②のお答えをお願いします。

田中： はい、失礼します。教員の協働の部分ですね。学校全体としての取り組みについては、授業研究を8年間行っておりまして、授業研究委員会は、最初、進路指導部が管轄して、そのメンバー構成は各学年の進路担当だったので

が、それでは各教科が足並みをそろえて取り組むのがなかなか難しいということから、進路指導部から独立した形で授業研究委員会のメンバー構成を大きく変えました。今は、教科と進路と教務というメンバーで、私がそれをまとめるという形で行っています。その部分では、それ以降は各教科、すなわち全教員が取り組む形になっている部分があります。

ただ、研修の参加については、なかなか難しい部分があって、始めたころは参加率が悪い教科については、管理職からその教科の主任に話をすることもありました。それは進路が行っていたところで、それ以降はメンバー構成も変えて、かなりみんなに参加してもらえる形になりました。問題は、他の指導とのバッティングがあります。部活動、補習、講習などとバッティングしてしまいます。また、やはり考査前などに研修を入れられると、働き方改革の面でも難しいので避けてほしいということもあって、日程を選ぶときには非常に苦労しています。実は、昨日、研修があったのですが、本当は11月末に行う予定だったのです。その11月末はコロナの関係で行けなかった修学旅行とバッティングしてしまって、昨日は試験前とバッティングしてしまいました。最終的に参加者が少なく、どうなるのだろうと思ったのですが、いろいろな指導が終わると、徐々に増えてきました。今の雰囲気は、特に生徒指導などの他のことがなかったら、みんなが参加するということはあるかと思います。その辺りは、こちらも企画するときに、いろいろ教員の様子などに配慮しながら、考えているところでしょうか。池田先生からも何かありましたら、お願いします。

池田： そうですね、探究に関して言うと、探究委員会があるわけでもなく、担当分掌、担当委員会がない中で行ってきたところもありました。先ほどの発表で言いましたが、個人の先生に対して大変負担がかかっていたところも

あったので、それを全体化したいということです。先ほどの探究研修では、私は人権推進委員会も担当しているという立場を利用して、本校は、いじめ防止プログラムの一環として、探究ナビ1回目の授業で、全学年、全クラスで集団づくりのアイスブレイクを行うという位置付けにします。いじめ防止に関わらなくて良い先生はいませんし、今は法的義務で求められていることなので、そのように全校的にアイスブレイクを行うための研修ともするのです。そのときに、探究ナビ1回目の授業でもあるから、探究とはそもそもこのような授業で、アイスブレイクはこのような意味があるということを伝えます。1回の研修で、いじめ防止プログラムの実行にもなるし、本校の柱でもある探究への理解にもなって、担当する教員とそれ以外の教員も共に参加して行えます。その研修自体が教員の集団づくりの第一歩になっています。4月は新転任の方もいらっしゃるって、最初は教員同士の中でなかなか関わりがなく、不安な教員もいます。そこで一緒に参加して、輪になってゲームをすることで、実は教員同士のアイスブレイクになっています。その後、研修以外でいろいろな仕事をお願いしやすくなったり、新しく来た先生との関係を結びやすくなったりする機会にもなっています。実際に、新転任の先生から「こんな機会をありがとうございました。なかなか他の先生と話せなかったんです」と、御礼を言われたこともあります。それは、生徒も同じように感じて4月を迎えているのだろうから、そのような気持ちを大事にして、教員や生徒の間で行っていける機会ができれば、探究への理解が深まるかと思っています。

また、探究は本校の柱の一つなので、私は広報委員という立場を利用して、広報のスライドをつくるときに、書き入れています。広報は、本校の場合、主に、分掌長と新転任2年目までの先生方が担当して行っているのですが、その新しく来た先生方に、探究とはどういうことか

を理解してもらう機会になっています。私は、学校広報とは、外向けだけに行うのではなくて、スクールアイデンティティを内外に示すために行っていると思っています。そのため、学校の中においても、私たちは何を目指して、どのように学校として行っていくのかを内側に示す行為でもあるから、広報の活動を利用して共通理解をしていきます。このように、人権推進や広報などの立場でできることも行って、通常の研修以外の機会でも「探究とは何か」ということが共通理解できるよう努力をしています。生徒も先生も同じ人間だから、やはり意味が分からないことをさせられていると思ったら、負担感が大きいです。「負担」と「負担感」は違うと思っています。負担はなかなか減らせませんが、負担感は減らせるだろうと思います。意味が分かってしてみたくなる、これを行うことで教員にも生徒にもメリットがあると実感できるような機会をたくさんつくるのが大事かと思って、日々意識して行っているつもりです。



細尾： ありがとうございます。では、次に質問2への回答をお願いしますか。

田中： はい。「パフォーマンス課題の限界」ですが、パフォーマンス課題は、最初の3年間の文部科学省の調査研究のときにいろいろ取り組んでいて、例として数学を挙げさせてもらいましたが、そのストックとしてできたパフォー

マンス課題を1年間、並べて見ると、ちょうどまいこと1年間の計画にできました。1年間、それで計画を立ててしまおうと考えたら、なかなか難しいです。新しいものを次々とつくっていくということはかなりつらいので、できたものをためていって、前の先生がされたものを少し変えてしてみようかという形で良いと思います。そのようにしていくことで、徐々に教科として積み重ねができてきて、良い形になっていくのかと思っています。どの教科も、全部、そのような形でシラバスにパフォーマンス課題を位置付けて行っているかというところ、そうではなくて、できているところはその範囲で行いましょうということです。だから、パフォーマンス課題で全て解決できるということではなくて、パフォーマンス課題としては非常に有効なものかと私は思っています。

また、メタ認知の評価ですが、そこはかなり難しいので、時間がかかると思っています。クローバープランのメタ認知を始めたのが3年前で、そのときは国の調査研究の下で行っていたのです。今年は、やはり小・中・高一斉にキャリア・パスポートがスタートしたのがかなり大きいということで、新1年生の担任団は非常に前向きに取り組んでくれていました。計画は立てていても、実際に行うのは担任団なのです。担任団がどれだけ力を入れて行ってくれるのかというのが、かなり難しいです。キャリア・パスポートになったこともあって、今の1年生の担任団が、それを、非常に前向きに取り組んでくれて、その結果が徐々に出てくるのではないかと考えています。すぐに結果が出るものではないと思っています。しかし、粘り強く続けていきたいと思っています。

池田： パフォーマンス課題については、私は社会科、地歴・公民の公民科の教員なので、パフォーマンス課題について学んだことを、この前の倫理の授業で行ってみました。古代ギリシ

ア哲学の単元を勉強した後に、古代ギリシアの哲学者が一堂に会した「アテネの学堂」を、ラファエロがルネサンス期に描いているのですが、それを自分たちでつくろうというパフォーマンス課題を設定しました。それぞれの哲学者が、いろいろなポーズで絵画の中に描かれているのですが、そのポーズと思想は結び付いています。そのため、自分たちで学んだ思想を、単元の最後にポーズで表現しようというパフォーマンス課題でした。しかも、本校はロイロノートを試験的に導入しているので、そのロイロノートという授業支援アプリのカメラ機能を使って、実際にポーズを写真に撮りました。「なぜ、そのポーズをしたのか」「この哲学者はこの考え方をしているからこのポーズで表現しました」ということが分かる形で写真を撮り、ロイロノートのプレゼン機能を使ってプレゼンさせて、しっかりとルーブリックで評価するというを行ったのです。やはり手探りの部分があって、科目によってなじむ・なじまないはあるかもしれませんが、パフォーマンス課題というのは、これからの教育においては、本当に授業支援アプリとの相性も良くて、方法としては良い考え方です。テストで記憶力だけを問うのではない部分で評価できる可能性を秘めていると非常に感じました。方法は、手探り状態なので、うまくいかないところもありますが、そのようにうまくいくところもあります。

細尾： 質問3への回答もお願いできますか。

池田： 探究については、本当に難しくて、一緒に活動していくといっても、コミュニケーションが苦手な、初めからシャッターが下りているような生徒もいます。家庭環境がいろいろあったり、いろいろ課題があったりするような多様な生徒がいる本校の中で、みんなで探究を行っていくためには、個人と集団の2つにそれぞれアプローチしていくのが大事だと考えてい

ます。先ほどのピラミッドの一番下で示したように、アイスブレイクは集団へのアプローチです。どのような集団をつくっていくのかというときに、ただ「アイスブレイクで遊んで、楽しかったね、おもしろかったね」というように、体験があり、学びはなしで楽しかっただけでは意味がないと思っています。例えば「名前ビンゴ」という、16マスの何もないビンゴにお互いの名前を書き合って、自己紹介を兼ねてお互いの名前を知っていくというアイスブレイクの回があります。その最後には、名前とは何だろうと、名前がある意味を考えていきます。名前があるのは、その人に祈りや願いが込められた証しであるという話をしていきます。そのような者同士がこれから一緒に付き合っていくのに、その名前をどう利用するのか、そもそも傷つけるため、存在を損なうために利用することもできるが、どうするのかという問い掛けをしてみて、お互いの存在を肯定していく集団づくりをしていこうと伝えます。

チームビルディングのときも、チームには何が大事かということから「チアウェーブ」という、先生を座らせないいす取りゲームをします。輪になって、1つだけ空いた席に、先生が座ろうとしたら、ウェーブのように生徒が席を移動して、先生を座らせないというゲームです。これもチームワークであって、先生を座らせないという目標が共有できたらチームになれます。それは素晴らしいけれども、目標は怖いよね、どんな目標でもチームになれるよねと話をします。「先生を仲間に入れないという目標でも、これだけチームになれたよね。人間は、誰かを仲間に入れないという目標を共有してもチームになれてしまうよね。何のための目標なんだろうと、しっかり考えないとね。目標があればチームになれるだけだったら浅いよね。どんな目標か、中身が大事だね」という話をして、どのような集団になっていこうかというところを最初にしっかり丁寧に行っていきます。そう

すると、警戒して何をさせられるのだろう、参加しないでおこうという生徒たちも、徐々に安心してきて、これから、そのような集団づくりをしていくのだということを生徒自身も理解してくれます。「探究が嫌で参加しません」「この日休みます」という生徒はあまりいません。

集団をきちんとつくっていく一方で、個別にもアプローチします。その日の状態によって、なかなか入りにくい生徒もいます。その場合は「休んでいいよ」「席を外すか」と言ったり、教室の隅に休むスペースをつくって「そこで見ていて」などと言ったりして、乗り降り自由のように、状態に応じて参加できる範囲で行っています。だからといって「あなたは、これに参加したとは見なしません」ということはしないで、生徒は自分の状態をきちんとメタ認知し、調整しながら、できたら参加できる方向に行い、こちらもファシリテーションしながら、生徒を尊重して行っていきます。それを見て他の生徒も、自分もそのように扱ってもらえるのだろうと安心します。「何かさせられる」「みんなで話し合わされる」というような心理的プレッシャーで行っていくのではないというところをしっかりと伝えていかないと、ピラミッドの上が低くなり、適当にやり過ごす、人の意見に合わせる、何も言わないで黙って過ごす時間になってしまうことがあるので、集団と個人にそれぞれしっかりとアプローチすることで、相互作用で参加率が上がる、意欲が増えていく流れが大事だと思っています。

細尾： ありがとうございます。では、事例報告③の質問1への回答をお願いします。

野村： 千葉大学で、ボリュームゾーンをどうするかということなのですが、千葉大学は全国区の大学ですので、ボリュームゾーンとの接続というのはなかなか難しいところがあります。ただ、われわれの高大接続・連携の活動の中で、

特に国際研究発表会などでは、いろいろな生徒の参加を認めています。そのような意味で、直接、千葉大学には入ってこないだろうと思われる生徒でも、自由に参加して、発表できます。われわれは、他のものは理系にこだわっているのですが、理系の科学の実験というのは人を選ぶのです。われわれが選ぶというよりは、生徒が「これは、ちょっとやりにくいな」というところがあります。英語でプレゼンをする部分は、何か話がしたいという気持ちさえあれば、われわれは「日本の文化紹介でもいいですよ」という形で受け入れているので、そのような形で入ってくるという入り方はあります。実際に、非常にたくさん入ってきてくださっているとこもあるし、それを通して、グローバルな視点が育ち、そのような方向に向って、生徒たちに自分の人生の目標を設定してもらえればよいのかと考えております。



細尾： ありがとうございます。2つ目の質問について、1つ目の報告は、主体性を育む仕掛けに関するもので、2つ目の報告は、クローバープランやICEモデルを活用したメタ認知や主体性の評価に関するものでした。主体性の指導や評価などの高校の実践について、大学としてどのように受け止められているかということをお願いします。

野村： お話をお聞きしていて、大学での学びのスタイルと非常に近いなと感じたのと、その

ようなところを育てていただくと、大学の中で、自分で学ぶところが非常にうまく動くのかというように考えました。単位制で、カリキュラムを自分で考えるというのは、まさに大学の学びのあり方で、スカラーというのは大学では自由選択単位に当たるのかと思います。自分で目標を持って、大学の授業を取って、自分はどのようなのかということを明確に考えられる力は非常に大事だと思いますので、それは高校のときから育てていただけるのは非常に良いことかと思います。

また、大学では、今、アクティブ・ラーニングが非常に言われていますので、チームビルディングをして、そのチームで学び合う姿勢が非常に大事だと思います。先ほど、アカデミック・リンク・センターという新しい図書館のご案内をさせていただきましたが、まさにそこは学生同士が集まって、課題を探究していくという場になっております。そのような意味では、非常に勉強になるものでした。メタ認知の評価は、確かに、そのようなことを通して自分を知ってもらうのは大変良い試みなので、ぜひ大学でもそのような授業を取り入れていったほうがよいかと思いました。

細尾： ありがとうございます。大阪府教育センター附属高校と城南菱創高校は、それぞれ高校ですが、お互いのフィールドが違います。相互質問ということで、事例報告①の澤井先生から、大阪府教育センター附属高校の実践を聞かれてどのようなことにお感じになったか、質問でも感想でもお願いできますか。

澤井： はい。今、おっしゃったとおりで、同じ高校でも、まず他府県の取り組みを聞く機会は意外に少ないです。そのため、このように非常に詳細な報告をいただきましたので、特に、今後に関しましては、評価の部分では悩んでいるところがございますので、主体性の仕掛け作

りをいかに評価につなげていくかというのは、これから2年、3年のわれわれの課題だと思っていますので、その点は非常に参考になったと思っています。ありがとうございます。

細尾： ありがとうございます。田中先生から、城南菱創高校の実践についてのご感想などをお願いします。

田中： 本校も普通科単位制です。10年を超えて、次の10年に向けて、どのように学校をつくっていかうかと考えているところです。実際、本校の生徒、ボリュームゾーンの生徒が単位制の中で選択しようとする、非常に難しい面があります。逆に、ある程度、レールを敷いてあげたほうがよいのかもと思って、今、それを考えています。コースを選ぶときに、まず、しっかり考えるのがよいのではないかと考えています。今日のお話を聞いて、改めて、これからの自分の学校をどうしていくのかということ、もう一度、考え直そうかと思ひまして、非常に勉強になりました。ありがとうございます。

細尾： ありがとうございます。では、最後に一言ずつ、今度は逆の順番で、全体を振り返って、一言ずつお願いできますでしょうか。

野村： 大学の立場で今日の話聞かせていただいて、高校・大学が同じ方向を向きながら人材育成することは、良いことなのではないかと思ひます。大学ごとにそれぞれキャラも違いますから、大学と高校の組み合わせはいろいろとありうると思いますが、人材育成を考えたときに、やはりつながっている部分は非常に大きいので、その部分をいかにうまくつなげていくのか、いかにそれを多様につなげていくのかという部分をこれからみんなで研究していくことが、より効果的な人材育成につながっていくの

ではないかと思います。また、それとは別に、その間で悩むということも、高校生、大学生の人生の発展に非常に役に立つと思うので、スムーズにつながる部分とストラグルする部分がうまく残るように組めると、きっと面白い人材育成が進むのではないかと思います。



細尾： ありがとうございます。池田先生、お願いします。

池田： 学びのスタイルが、高校と大学で徐々に共有されていっている時期かという感じがしています。本校の卒業生が来てくれたときに「探究は、やっているときはそう思わなかったけれども、大学へ行ったら、話し合うとか、それを発表するとかいうスタイルで勉強することが非常に多いから、周りがまごついている中、自分たちはそれをリードできるような立場になりました」と言っていました。また「専門学校のプレゼン大会で優勝しました」という卒業生からビデオメッセージをもらって、探究の授業で流して、先輩方はこのようになることができていると紹介しました。学びのスタイルは、新しく高校と大学がお互いに共有して行っていけたらよいというのはあります。

しかし、学びのコンテンツについては、やはりオーダーメイドで目の前の生徒に何を学んでもらうのかということが大事だと思います。コロナ禍でつくづく思いましたが、オンラインだけで良いのだったら、私は社会科ですが、日

本一うまい社会科の先生が全学校にオンライン授業をしたらそれで済みます。逆に言ったら、贅沢なことに、いろいろな学校のいろいろな生徒、生身の生徒に、生身の人間、教員がたくさんいて、目の前の生徒に合う内容で授業を行っているという、ありがたい状況です。そのような贅沢な状況なので、教育とは常にオーダーメイドで、生徒のために何ができるかというところがあるし、それができることが私たちの現場の大事な部分だということがあります。今、3年生をどうしようかと、探究2.0ということで考えているときに、本校の生徒にとっての探究とは何か、生徒にとって意味のある探究とは何か、必ずしも大学受験だけではない、多様な生徒たちにどのような探究をしてもらうかということを考えようと思いました。澤井先生の報告はすごく参考になりましたし、それをこれから考えていこうと思いました。

細尾： ありがとうございます。澤井先生、お願いします。

澤井： 失礼します。先ほども言わせていただいたのですが、同じ高校でも他府県の取り組みを聞く機会は非常に少ないですし、また大学での取り組みを同じ土俵で聞かせていただく機会はもっと少ないと思っておりますので、今回は非常にありがたかったと思っております。本校に関しましては、理論がまず明確にあって、それに基づいたシステム設計をしているというわけではなくて、まず実際に行ってみて、その後、その経験の成否を分析して、次年度につなげるという流れになっております。そのため、本日の皆さんの報告を聞かせていただきまして、本校のこれからの仕掛け作りの大きな参考になるかと思っております。本日は、ありがとうございました。

細尾： ありがとうございました。主体性を育

む仕掛けや、その評価、高校と大学の双方向の連携や接続について、手探りでまず行ってみることが大事なのかと思いました。成果は時間をかけて現れるということ、また「負担＝負担感」ではないということが興味深かったのですが、意義を伝えて負担感を減らしたり、また生徒が休める場を認めたりしながら行っていく、その中で手ごたえが見えてくるのかと思いました。

ありがとうございました。